

# 北京・漢城両京師の祭祀祈禱における 「犠牲」についての一考察

## —天下安寧祈願に必須な存在をめぐって—

大野広之

**要 旨：**本論考では、北京とソウルにみられる祭祀祈禱には動物肉を供物として捧げる習慣が欠かせないことに着目した。清朝時代には、儒教やチベット仏教のみならず、シャーマニズムによる祈禱についても矛盾することなく実行されてきたが、それは朝鮮時代でも共通してみられる実相がある。こうしたシンクレティズムの様相は王朝の終焉を経て、現在においても非常に稀有な状況としてその実相を見ることができる。満洲族、漢民族、朝鮮民族においても動物肉を供物として捧げることの意義について若干の考察を加えた。

**キーワード：**お供え物、天壇；圓丘壇、儀式と祈り、シャーマニズム

## A Study on Offerings in Rituals and Prayers in the Cities of Beijing and Seoul – A Necessary Entities for Praying for World Peace –

ONO Hiroyuki

**Abstract:** This paper focuses on the indispensable custom of using animal flesh as offerings in ritual sacrifices and prayers observed in Beijing and Seoul. During the Qing Dynasty, not only Confucianism and Tibetan Buddhism rituals were consistently practiced, but also shamanistic prayers were performed without contradiction, reflecting a common reality also seen in the Joseon Dynasty. Such syncretic practices, persisting beyond the fall of these dynasties, can still be observed today in very rare instances. The study also explores the significance of offering animal flesh as sacrificial gifts among the Manchu, Han, and Korean peoples.

**Keywords:** Offerings, Temple of Heaven; Circular Mound Altar, Rituals and Prayers, Shamanism

### 0 緒言

これまで発表者は、大野（2021a）「ソウル圓丘壇をめぐる若干の考察」、及び（2021b）「天壇・社稷壇祭祀執行における『犠牲』をめぐる若干の考察」、さ

らには（2022）「国師堂(국사당)移転に観られる「犠牲(희생)」についての一考察」において、冬至年初の祭天祭祀が北京天壇のみならず朝鮮王朝・大韓帝国でも執行されたこと、また祭壇には豚肉を

主体とした「犠牲(희생)」が奉じられたことについて考察を加えてきた。また、朝鮮半島では有史以来、シャーマニズム(巫俗)が民間信仰の形で半島各地に残っていることに着目していくと、満洲族が清朝時代に薩満の祈禱を執行していたことと同様に、朝鮮半島においても、満洲族の薩満と同様にして、時として豚肉(豚の頭)を祭祀の時に奉じていることが共通した現象として浮かび上がってきた。そこで、本稿では、これまでの得た考察を纏めて報告するところから、さらに新たに卑見の及ぶ限りではあるが考察を加えていくこととする。

## 1 天壇(祈念殿・祈穀壇)における祭祀執行

天壇における祭祀については、これまで拙稿(2018)(2019)(2020)で考察を続けてきたところであるが、冬至祭に際しては、『欽定日下舊聞考』にその記述がみられる。祈念殿、及びその両脇に安置されている位牌(御神体としている木製のもの)の前には、供物については次のようなものであった。

——〔欽定日下舊聞考、卷五十七城市外城南城一〕(上略)玉帛實於筐，牲載於俎，尊實酒，疏布勺具。

ここに、「犠牲」(供物としての動物肉)の記述がみられるが、具体的にどのような動物肉を実際に供物として捧げておいたのかは注釈が見られない。

また、祈念殿を取り巻く他の建造物、神厨や皇乾殿なども含めて祈穀壇と称されている天壇の心臓部にあたるところの記述をみていくと、次のような記述が見られる。

——〔欽定日下舊聞考、卷五十八城市外城南城二〕凡祈穀之禮，歲以正月上辛祀上帝，為民祈穀。

ここでいう祈穀壇とは、祈念殿のある場所と同じである。つまり、冬至年初の時は祈念殿主体で祭祀を執り行い、正月上辛(つまり立春)には、祈穀壇と認識を変えて祭祀を執り行うのである。これは拙稿(2018)でも考察したとおりで、王曆・民曆の二つを意識してのことであった。

そして、農事の五穀豊穰を天に祈禱するのが、立春の祭天行事である。祈穀壇としての祭祀にはやはり「犠牲」の存在は不可欠なものであるが、その動物肉を管理するところを「犠牲所」と称した。これに関しては、次のような記述が見られる。

——〔欽定日下舊聞考、卷五十八城市外城南城二〕犠牲所建於神樂觀之南，東北為司牲祠。(以下略)

ここでは、兔、鹿、羊、牛、豚が実際に飼育されており、毎回の祭祀には「犠牲」として祭祀に供物として捧げられた。現在の天壇公園の見取り図には、神厨の東側に「宰牲亭」として残っている。

『欽定日下舊聞考』の中では、冬至年初の祭祀よりも立春年初の祭祀に関する記述の方がより詳細な説明がある。これは、農民による農事の五穀豊穰を願う祭祀の方がより実存主義的な性格が濃厚であったことに起因するといっていよう。また、曆術思考の中でも立春年初によって、農事の計画も立案しやすいこともこれまでの経験によって歴代王朝が継承してきた側面もあろう。但し、立春に

において、こういった動物肉を「犠牲」として供物としたのかは、卑見の及ぶ限りではあるが、祭壇の左に豚一頭、右に羊一頭であるようだ。

## 2 社稷壇における祭祀執行

社稷壇は現在の中山公園にある。かつては仲春（啓蟄から春分を経て清明まで）に祭祀を執り行い、清朝にあっても全国から土を集めて、陰陽五行思想に則り「五色土」として祈禱できるよう配置されたところである。乾隆年間にも旺盛な意欲を以て社稷壇祭祀を執り行ったのだが、乾隆帝自身が残した御製詩の中にも、「三牲」を供物として捧げた旨の記述がみられる。

——〔欽定日下舊聞考、卷十国朝宮室〕  
乾隆二十八年御製仲春祭社稷壇詩（上略）五戊遵今古，三牲卜吉【益蜀】。  
乾隆三十三年御製仲春祭社稷壇詩（上略）三牲獻博碩，一意致虔恭。  
乾隆四十一年御製仲春祭社稷壇詩（上略）五土色原備，三牲博以尊。

ここで言う「三牲」が何を指すかについては割注がみられないので直接は不詳であるが、現在の漢民族の祭祀で不可欠な「三牲四果」の中では、「鶏、豚、鴨（あるいは魚）、四季時令水果」と考えられているところから推測すると、このときは「羊、牛、豚」あたりではないかと推測する。いずれにしても、天下の安寧を期して祭祀を執行したことは想像に難くないといってよい。

## 3 『欽定満洲祭神祭天典禮』にみられる「犠牲」の解釈をめぐって

さらに祭祀について書かれた言語資

料としては、『欽定満洲祭神祭天典禮』がある。これは、本駒込の東洋文庫にその所在を確認することが出来る。発表者は、2年前に東洋文庫にて閲覧した後、その一部を複写資料として家蔵しておいた。書誌情報としては、請求記号【II-15-C-17】『欽定満洲祭神祭天典禮』、漢文単体のものである。また、近年、葉高樹訳注『満文欽定満洲祭神祭天典禮譯註』（2018年3月第一版，秀威資訊科技股份有限公司，台北）が出来たことも併せて考察すると、台北訳注本は東洋文庫の満文単体の方を取り扱ったことがわかる。発表者が複写したものは漢文本であるので、双方を照らし合わせていくこととする。

東洋文庫版本所蔵については、“Catalogue of the Manchu-Mongol section of the Toyo Bunko”によれば、満文本は所蔵番号 432、漢文本は 433、434 とある。葉訳注本は 432 に依拠しており、発表者が複写した資料は 433 のものである。434 は 433 の修訂本である。

この漢文本にみられる「犠牲」の最初の用例は、請求記号【II-15-C-17】『欽定満洲祭神祭天典禮』巻一にみられる。

——〔欽定満洲祭神祭天典禮巻一獻鮮背鏡祭議〕我満洲之禮，凡祭神，祭天，犠牲俱用整齋全備者，稍有殘缺，即斥而不用。

上掲の満文については、葉訳注によれば、

——musei manju sai kooli de.yaya wecere. metere šusu be gemu gulhun muya hūnmingge baita lambi. majige eden dadun ningge be uthaibaita laraku.

とある。

ここのみを対照しても、満洲語の「犠牲」にあたる単語「wecere ulha」がそのまま記載されているということではなく、「wecere. metere šusu」（天を祀り、神に願掛けした食物物什）と祈禱も含めて説明するような表現で書かれている。こうしたところは、最初から満漢合璧の形式で書かれたものではないために、若干の揺れはみられるところである。さらに満洲語の記述を追って行くと、次のような記述がみられる。

—tuttu wecere šusu be hen i majige funce burakū. .yooni weceku de dobombi.  
漢語部分は、  
—是以祭祀之犠牲， 供獻神位， 不稍留剩。

とあり、「wecere šusu」「犠牲」が各々対応する。

この「šusu」については、羽田亨（1972）によれば、「外地の公務に派遣する官人官兵に供給する食物物什」であり、『御製増訂清文鑑』には、「廩給」とある。つまり遠く離れた存在、ここでは天神に対する食物というところから、やがて「wecere ulha」として定着するまでの過渡期にあたる用例と考えられる。

そして、漢語の「犠牲」については、豚を屠殺する行為であるが、忌字と同様に直接の表現を避けて漢訳された用語である。この点については、豚を屠殺することを「省」、豚が死んだことを「氣息」と表現しているのも同様である。

また、満文本で書かれた祭詞の執行は主として坤寧宮において行われたことから、満洲族によるシャーマニズム（薩満）の祈禱を主体としていた。

#### 4 坤寧宮にみえる「犠牲」出来の実相

『欽定日下舊聞考』には、坤寧宮に関する記述はあるものの、薩満による祭祀祈禱を行うところといった記述はみられない。乾隆帝がいくつか頌歌としての詩文を残した記述があるが、その中にも薩満による祈禱などの記述は皆無である。そこで、先頃出来した吳正格『満族食俗与清宮宴膳史』によれば、清代の祭祀に必要な供物について詳細な記述がある。わけでも、立春には、宮中でも五穀豊穰を祈願して豚・羊を「犠牲」として祭壇に捧げた。また立秋にも同様であった。冬至については、宮中も民間と同じく「祭灶」を執行したようであるが、ここには、「犠牲」は供物として捧げられることはなかった。また、天壇の冬至年初の祭天祈祷はあくまで王暦の曆術思考の基本となるものであり、秘匿に類するものであるため、詳細な記述はここでもみられない。

坤寧宮では、元旦、立春、立秋のときには「犠牲」としての豚は不可欠の供物であった。宮中の最北に位置するところであり、江湖の目に触れられるところではないが故に、豚を祭祀の為に供物として捧げた後は、参列者に各々食事の席にも切り分けられたようである。また、満洲族は祭祀の為に豚肉を家臣に分け与えて、祭祀に参列した全ての人によってその後の宴席に供する食材としての嗜好性も高かったようである。こうした経緯から、後の満漢全席に供される食材として、豚、羊の両者は不可欠な地位を保つこととなったのである。

また、旗人の王府において、豚を「犠

牲」として供物に奉ずることが出来ない場合には、「麵猪神」と称して、小麦粉を練って豚の形にして、本物に擬して祭祀を執行したこともあったようである。

## 5 圜丘壇

朝鮮における圜丘壇祭祀の復活の過程については、桑野（2002）に詳細な研究がある。桑野によれば、世祖三（1457）年に圜丘壇祭祀の復活が企図されるも、冬至に執行される祭天の儀礼については、北京に在位する皇帝のみが執り行う儀式であり、朝鮮は服属する立場である以上、北京と同様に執行するのは不穏当と世祖は考えたのだが、表向きは世祖自身の病気のためとして冬至祭天の儀式を取りやめにしたようである。そして前述したように「冬至使」を北京に朝鮮からの使節として派遣し続けていくこととなる。その一方、圜丘壇はそのまま存在するのみとなった。そして朝鮮王朝が滅亡するまでは圜丘壇及び皇穹宇は儀式で使用されることはなかったが、大韓帝國になると、高宗（元來は朝鮮王朝 26 代。国号を大韓とした最初の皇帝）は 1897 年 10 月 12 日に祭天の儀礼を執行したが、その際に使用されたのはまさにこの圜丘壇であった。このときには清の服属から脱したために「独立門」を造営して朝鮮自らによる施政の目論見もあったが、1910 年には日本が朝鮮を併合するに至り、圜丘壇それ自体は日本の手によって跡形もなく破壊されてしまい、跡地には「朝鮮ホテル」（現・ウエスティンチョースンホテル）が建造されてわずかに皇穹宇が残存するのみである。朝鮮ホテルは 1914 年 10 月 10 日に開業して現

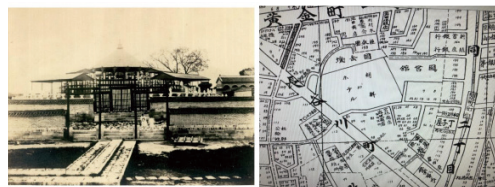
在に至っている。

## 6 日本統治時代の京城府にみられる圜丘壇

漢城から京城（正式には京城府）に名を改めた日本統治時代には都市の近代化がすすめられていくところとなった。李（1992）、邢（2004）、五島（2013）、徐他（2013）の研究において、京城がモダン文化を体現するまでに至った都市計画や建設の過程が審らかにされている。わけても徐他（2013）には、朝鮮ホテルの敷地が「長谷川町圜丘壇」に内定していくプロセスが明らかに示されており、『毎日申報』や『朝鮮新聞』にも朝鮮ホテル建設に際しての記事が掲載されているが、朝鮮ホテル建設前の圜丘壇と皇穹宇とは、南北に連なる中軸線に位置していることが徐他（2013）の研究で明らかにされている。これによると、北京の天壇における圜丘壇・皇穹宇の位置とは全く逆に置かれていることがわかる。つまり、漢城時代から京城に引き継がれた両者の建物は、圜丘壇が南側に、皇穹宇が北側に位置しており、そのうち南側部分に朝鮮ホテルが建造された結果、現在でも北側に位置している皇穹宇が残されているということである。

朝鮮ホテル建造前の圜丘壇については、大正 2 年（1913）の画像が残っている。

また、朝鮮ホテル竣工以降は、圜丘壇と皇穹宇とが各々地図に記載されている。





『京城精密地図』三重出版社，昭和 8（1933）年，京城。

『大京城府大観』朝鮮新聞社，昭和 11（1936）年，京城。

徐他（2013）「図8 朝鮮ホテルと皇穹宇」から

こうして、圜丘壇のあった場所は、奇しくも来賓を迎えるために日本統治時代の朝鮮を代表するホテルとしての機能が継承されていくことになった。つまり、圜丘壇は、冬至祭天などの祭祀を、朝鮮王朝の頃と大韓帝國時代のそれぞれに一度ずつ執行したが、それ以外は清朝からの使節を招いて祝宴を行い宿泊させる場所であったから、外国からの賓客を接遇する場所、すなわち「迎賓館=ホテル」であったと言えるのである。

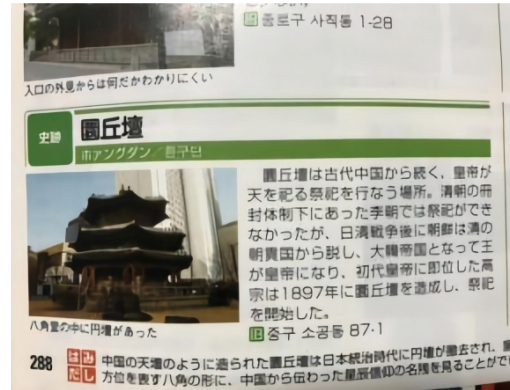
## 7 戦後のソウルにみられる（圜丘壇）

戦後も引き続き「朝鮮ホテル」の名称を継承したままソウルを代表するホテルとして経営は引き継がれていった。戦後 11 年が経過した 1956 年には、이용민監督の韓国映画「ソウルの休日(서울의 휴일)」という作品が 한국고전영화 Korean Classic Film で公開されている。その中では、近代的なビル建築になる前の朝鮮ホテルのシーンが出てきているが、その中に 圜丘壇（朝鮮ホテル）と皇穹宇が映っている。



韓国映画「ソウルの休日(서울의 휴일)」より（朝鮮ホテル正門、テラス席からみた皇穹宇）

また、近年の旅行ガイドブックには画像付きで圜丘壇の説明があるが、一般的には割愛されているガイドブックが多く、詳述されているものは皆無である。



地球の歩き方編集室『ソウル13-14』ダイヤモンド・ビッグ社，2013年改訂14版，東京。

## 8 国師堂(국사당) 移転の経緯

国師堂(국사당)、「正式名称：木覓神祠(목멱신사)」は朝鮮王朝を築いた太祖・李成桂が檀君を祀ったもので、朝鮮民族の精神的支柱ともいえる存在である。時代が下って、1910 年から日本統治時代が始まるが、その際に、朝鮮神宮を国師堂がある木覓山（現・南山）に建立することが決定され、1925 年に造営された。このときに元来あった国師堂は移転を余儀なくされ、京城府西北の仁王山に国師堂の巫師らの手によって再建立された。

小針（2022）によれば、崔書勉がオーラルヒストリーとして朝鮮神宮建立から太平洋戦争終戦直後の遷座に至るまでの経緯を次のように語っている。（以下、当該部分引用）

——それで、もとの朝鮮神宮には国師堂というシャーマニズムの社があったんですが、朝鮮神宮をつくるときに「もっといいところをあげるから、引っ越しなさい」というので、これがいまだこに行っているかということ、西大門刑務所の前の洗岩

というところの隣に、昔のそのままが残っています。（小針， p72 下段、引用はここまで）

移転するときの経緯の詳細については、未詳ながらも国師堂巫師が特に激しい抵抗を朝鮮総督府にせずと粛々と実行していたようである。移転先を地図（2014）で目睹したが、その近隣には社稷壇が位置しており、社稷壇を司る意識を以て祈禱をするにふさわしい場所として巫師が考えていたかどうかは未詳であるが、陰陽五行思想の観点から考えてみると、仁王山は「白虎」の方角にあることから、穏当な場所とってよい。



そして戦後から現在まで、国師堂はもともとあった南山に戻すには至ってはいないが、戻す意向はなかったわけではないことが崔書勉のその後の語り示されている。（以下、当該部分引用）

——それで、これも日本に関係のある話ですが、李方子さんが孤児院を置いてやることをさっぱりしないので、私は、「日本の朝鮮支配は、国師堂を元の朝鮮神宮に戻すことによって終わることを、皇族としてはそれしかやることがないよ」と言ったら、「それは私にやらせてください。私はいま八十八歳だけれども、八十八にこんないい仕事はない」と言って、出掛けようとして死んだんですが、韓国ではシャーマニズムの影響力がなくて元に帰ることはむずかしいかもしれませんが、朝鮮神宮盛衰史のなかで、追い出された国師堂が残って、それを追い出した朝鮮神宮はなくなったという笑い話ができあがるんじゃないかなと思っています。（小針， p72 下段~p73 上段、引用はここまで）

現在も、ムーダン(무당) が執行する巫俗儀礼(굿)においては、時として豚肉（豚の頭、あるいは豚一頭）を犠牲(희생)として奉じて、祈禱を行う様子が見られるのであるが、ここに満洲族の薩満とも共通する現象として捉えることが出来る。

## 9 朝鮮半島（韓国）における巫俗研究



近年の朝鮮半島（主として韓国）における巫俗研究については、崔（2021）に代表されるのみならず、多くの研究成果がみられる。新里（2017）によれば、韓国における巫俗研究は、日本統治時代の村山智順（1932）『朝鮮の巫覡』赤松智城・秋葉隆（1938）『朝鮮巫俗の研究』（上下巻、大阪屋号書店）を嚆矢として、現在に至るまで陸続と研究成果がみられるのであるが、戦後の韓国では1960年代までは、単なる迷信として糾弾されるのみにとどまることが多く、1970年代のセマウル運動では迷信打破の趨勢が強化されるに至った。1980年代の全斗煥政権下になると、社会浄化政策の下に仏教と共に巫俗も排斥の対象となっていたのではあるが、韓国文化の源泉とみなす視点が擡頭してくる。巫俗の中でも、占いに相当する部分は否定されるが、巫歌については、パンソリやサムルノリとの連関における研究姿勢は肯定されていくように、部分的なところが受容されて、文化としての側面が強調されて現在に至っている。

また、佐藤（2000）では、韓国におけるシャーマンの用語として、「菩薩(보살)」「巫堂(무당)」「占師(점쟁이)」「導士(도사)」の4つを挙げて、民俗用語で示される職能者としては、自ら称したり、または周囲から呼ばれたりしている状況があるとして、截然と切り分けられない様相を呈していると報告されている。おそらく、仏教の権威を借用していると考えられるが、実際にムーダンが巫俗儀礼を執行している様子を観ると、壁一面に仏像絵画が掲出されていたり、

護符が貼られていたりするのを目撃することが出来る。わけても、「占師(점쟁이)」には、侮蔑や卑下したニュアンスが含まれているという。ムーダンは圧倒的に女性が多く、稀に男性もいるとされる。

さらに川上（1998）によれば、近年は巫俗儀礼の類型と地域特徴が曖昧になってきている現象が観られるが、その原因としては、交通の発達によって韓国国内の移動が多くなってきたこと、また祈禱依頼者の出身地からわざわざムーダンを呼び寄せて、御当地の手法以外の巫俗儀礼も可能になったことなどが挙げられる。また、朝鮮戦争の影響で、38度線以北出身者が失郷民（越南した結果、北の故郷に帰れない人々）となって韓国国内に居住する事例もあるのではないかと発表者は推測する。

## 10 満洲薩満と朝鮮巫俗との連関

満洲族のシャーマニズムである薩満と朝鮮巫俗との連関について研究したものととしては、赤松（1935）にその一端が見られる。赤松は、「薩満」（満洲語の漢字表記）は一面「沙門」（パーリ語のSāmaṇa）にも通じるかとしているが、この点についてはさらなる検討が必要であろう。しかしながら、赤松の研究によれば、満洲薩満と朝鮮巫俗とを比較検討した場合、宗教民俗の観点からは、何某かの文化交流、複合伝播の可能性があるのではないかと指摘しているが、その根拠としては、シャーマニズムの類型を取ってはいるものの、仏教ないしは道教的影響を朝鮮巫俗にも見ることが出来るとしている。



上述した側面の他に、今回の考察で得た「犠牲」の存在についても、豚肉（豚の頭、豚一頭）が供物として奉じられている点に再度注目していきたい。増井（2017）によれば、赤松智城・秋葉隆（1941）『満蒙の民族と宗教』を上梓したなかで、祖先への供犠（「犠牲」を供物として奉じること）と祈禱とが一貫して観られること、儀礼執行中にトランス（憑依）があることなど、素朴な記述ではあるが、朝鮮半島の巫俗儀礼にも共通する点が指摘できよう。

孫（2015）には金九経の足跡に関する詳細な研究がある。金九経は乾隆 12 年に発刊された『欽定満洲祭神祭天典禮』について、詳細な校訂を施して 1935 年に『重訂満洲祭神祭天典禮』として葦園精舎より刊行した。また、同年には、論文

「満洲語と漢語を混用したる歌本：吃螃蟹」を『奉天圖書館叢刊』（第 21 号）に掲載したとあることから、満洲語研究にも傾倒した時期があったようである。朝鮮巫俗についての興味関心はなかったようであるが、1899 年に慶州で出生して、1921-27 には日本留学にあったものの、1928 年に渡燕してそのまま北京大学で教職に就く迄の間は、朝鮮（慶州、京城、開城）で生活していたことから、巫俗についての見聞はあったものと思われる。戦後、一時期はソウル大学にて中文科教授を務めていたが、朝鮮戦争当時に拉北されたようで、その後の足跡は杳として掴めぬままである。

金九経の他にも、朝鮮巫俗について研究した李能和の存在についても言及しておく。詳細は野村（2003）に観られると

おりであるが、李能和については、日本はおろか現在の韓国でもあまり知られていない。日本統治時代の研究成果を踏まえた韓国の若手研究が稀有なことについては、崔（2021）でも記載がある。また、野村（2006）では、朝鮮半島のみならず、

中国や日本にも祭祀性を失っていく過程で生まれた文化（鎮魂神楽、儀礼）が見られるが、唐宋五代の時代には、中国、朝鮮、日本に共通する想念があったのではないかと推測している。この点については、本発表で取り上げた満洲薩満と朝鮮巫俗とに見られる犠牲(희생)の存在に共通点があるところもみるべきところと考えている。

## 11 宗廟にみられる「省牲位(선생위)」

現在のソウル市内にある宗廟には、犠牲(희생)を整えた場所である「省牲位(선생위)」が残っている。



この「省牲位」と北京天壇の「犠牲所」とは、共に祭祀に備える犠牲の検査をする場所であり、宗廟（李氏）の祭祀を執行する際にはとりわけ重要視された場所といえるが、詳細は発表者による今後の現地考察に委ねたい。

## 12 朝鮮神宮取り壊しについて

昭和20年10月18日付『京城日報』2面には、「朝鮮神宮取壊し焼却」の記事が見える。出処は影印報刊資料による。



記事内容は判読しがたいが、可能な限り翻刻しておく。

——（前段翻刻不能）御本殿はこれを取り壊したあと焼却することとし（翻刻不能）十月八日完了した（これ以降は文字が重なっている）

朝鮮神宮の取り壊しの経緯については、山口（2014）によれば、終戦後直ちに「昇神式」を執り行って、日本内地に「お帰り給ふ」ことにして、現地での焼き討ちに遭わないように取り計らったことが指摘されている。これはもとより朝鮮半島土着の神々ではないために、日本統治終了と共に日本側の手によって即座に撤収を図ったためと考えられている。

## 13 在日社会にみられる祭祀(제사)

在日社会においても祭祀(제사)は日常生活で重要な役割を占めているが、韓国の祭祀と異なるところは、巫俗と仏教とがシンクレティズムの様相を帯びている点である。許（1994）によれば、奈良県生駒山地にある大興寺（通称：朝鮮寺。真言宗醍醐派）にそれがみられると指摘している。韓国の仏教寺院では、一般に仏教の中に巫俗的色彩を帯びた「ク

ッ（ㄱ）」の御堂が同居することはないが、大興寺では、仏教系の不動明王と併存しているのが特徴である。在日社会では、仏教と巫俗の境界意識は曖昧なところがみられるが、ここでもう一つ特徴的な点として、12月22日には「冬至祭」が営まれていることである。冬至祭は、卑見の限りではあるが、真言宗智山派、真言宗醍醐派の京都、奈良にある寺院で新年を迎えるための護摩法要を不動明王の前で執行する行事であるが、この大興寺でも行われているようである。日本に定住する在日韓国・朝鮮人の社会は、基層に韓国・朝鮮文化の命脈を維持しつつも、日常生活を送る日本文化の要素も取り入れてきた結果として、シンクレティズムの様相を帯びることとなった。この点について、許（1994）、また赤枝（2013）の研究によれば、ある都市でコミュニティが変容していく過程で、居住地における都市効果がポジティブなイメージが醸成されていく実相がみられれば、少数民族がある地域で一定数以上の人口が臨海点に達すると、自らのアイデンティティを再確認して、民族的伝統に立脚した固有の文化を創造する一方で、居住地の文化と完全同化していく過程とはなんら矛盾することなく、むしろ同時進行的に展開されるものであるという。この理論は、アメリカの社会学者 C.S. フィッシャーが 1970 年代に提唱したのを嚆矢として、都市社会学の分野で研究が進められているが、李（2017）によれば、在日社会に見られるコミュニティ変容（在日一世の時代から四世の現在まで）においても、信仰の側面でシンクレティズムを伴いつつ、韓

国・朝鮮文化と日本文化とがポジティブに変容していく過程の中に、巫俗の存在が位置づけられると考えられる。また巫俗と仏教のシンクレティズムは、主として、巫俗の方から仏教の方へ一方的に接近して傾倒していく流れであって、その反対の流れはほぼ見られない。

また、韓国及び在日社会において、祭祀の範疇にある「告祀(고사)」の存在がある。これは、陰暦の10月上旬に家神(日本の氏神に相当)に対して行う儀式を発端とするが、現在では、新規事業を始めるときに成功を祈願する厄除けの風習として一般に広く行われている祭礼である。このときには、豚の頭が中心に据えられて祈禱が行われるが、祈禱者は必ずしも巫俗の巫堂や仏教の僧侶である必要はなく、一般の人が集まって祈禱することも多いようである。この告祀を執行するときには、「犠牲(희생)」を供物として奉じることは現在でも行われていることから、韓国及び在日社会においては祈禱の現場では身近な存在として意識されているといつてよい。



なお、告祀が執り行われ、祈禱が終わった後は、豚の頭は「テジモリピョニユク(茹でた豚の頭肉/돼지머리편육)」として、参列者全員に振る舞われるとい

う。

また、東京都内に戦前から在日朝鮮人が集住する三河島、戦後から集住が始まった東上野の両地域にも実際に足を運んで「犠牲」について伺うことが出来た。



三河島では丸萬商店、東上野ではまるきんの店員の方に話を伺ったところ、おおよそ10年位前までは、豚の頭は店舗でも扱ってはいたが、現在では商品としては扱っていないとのことで、事前に依頼があれば応じることがあるという。

在日社会における「犠牲」をめぐる諸問題については、今後の研究対象として改めて考察を深めていく必要がある。

## 14 小結

本稿では、これまで筆者が関心を持ってきた薩満及び巫俗の祈禱に際して、「犠牲」の存在が共通して浮かび上がることを中心にして更なる考察を加えてきた。清朝においても、漢民族に対しては儒教を、蒙古・西藏についてはチベット仏教を各々巧みに利用して統治してきたが、満洲族のアイデンティティを保つためには、特に積極的に広めていった傾向は見あたらないにせよ、やはり表向きに

は、儒教、仏教に傾倒していく趨勢は維持しつつも、完全にマイノリティーたる満洲族自身が漢民族の文化に完全同化する側面と矛盾を孕むことなく、自民族の宗教文化として薩満による祈禱も同時並行で進めていった実相があるのではないかと考えられる。朝鮮王朝、大韓帝国、日本統治時代、韓国、朝鮮、そして併存する在日社会へと時代が移り変わっていく過程にあっても、民俗固有の信仰として、仏教やキリスト教とシンクレティズムの様相を帯びてきたように、清朝

時期の満洲族は、儒教、仏教とシンクレティズムの様相を呈しつつ、薩満による祈禱を欠かすことはなかったと考えられる。また、祈禱の際には、必ず「犠牲」を供物として奉じていたことも併せて付言しなければならない。かようにして、儒教、仏教、薩満の祭祀祈禱についても、清朝時期においては宮廷内で相互に影響を与え続けていた現象が窺える。今後は、北京及びソウルでの実地踏査の機会を得て、かような実相を審らかにしていきたいと考えている。

#### 原始資料及び参考文献及び論文

##### 原始資料:

允祿等奉勅撰『欽定満洲祭神祭天典禮』，漢文本，乾隆十二年（1746年），東洋文庫蔵，【請求記号】Ⅱ-15-C-17.

##### 参考文献:

- (1) 横田康（1926）『朝鮮神宮紀』，国際情報社，東京経済大学学術機関リポジトリ，桜井義之文庫.
- (2) 朝鮮総督府（1927）『朝鮮神宮造営記』，朝鮮総督府，神奈川大学非文字資料研究センター.
- (3) 赤松智成・秋葉隆（1941）『満蒙の民俗と宗教』，大阪屋号書店，昭和16年，国会デジタル【請求記号】160.2-A31 ウ 于敏中『日下舊聞考』，乾隆三十九年（1773年），点校本，北京古籍出版社，1981年第一版，北京.
- (4) 沈漢輔（2010）『京城日報』，韓国教會史文獻研究院影印，第205巻，2010年12月，ソウル.
- (5) 地球の歩き方編集室（2013）『ソウル，13-14』ダイヤモンド・ビッグ社，2013年改訂14版，東京.
- (6) ソウル特別市文化観光デザイン本部（2014）『ソウル漢陽都城ガイドブック』，PDF版，2014年5月，ソウル. 松浦章（2013）『近世中国朝鮮交渉史の研究』，思文閣出版，2013年10月初版，京都.
- (7) 葉高樹訳注（2018）『満文欽定満洲祭神祭天典禮譯註』，秀威資訊科技股份有限公司，2018年3月第一版，台北. 吳正格（2021）『満族食俗与清宮宴膳史』，学苑出版社，2021年6月第一版，北京.

(8) 崔吉城 (2021) 『キリスト教とシャーマニズム』, ちくま新書 1598, 2021 年 9 月, 東京.

(9) 小針進 (2022) 『崔書勉と日韓の政官財学人脈』, 同時代社, 2022 年 2 月初版, 東京.

#### 論文:

[1] 赤松智城 (1935) 「朝鮮巫俗の神統 (承前)」, 新 12:1-10

[2] 陶立播 (1992) 「清代宮廷の薩滿祭祀」, 志賀市子訳, pp6-21, 『比較民俗研究』第 5 号, 筑波大学比較民俗研究会, 1992 年 3 月.

[3] 李恵恩 (1992) 「1930~1935 年の京城府(ソウル)における民族別居住地分化の変遷」, 『歴史地理学』160 号, 1992 年 9 月, pp2-20.

[4] 許点淑 (1994) 「在日韓国・朝鮮人における巫俗信仰 : 巫俗と仏教とのシンクレティズムを中心に」, 『年報人間科学』15 号, 大阪大学, pp101-118.

[5] 川上新二 (1998) 「現代韓国社会における巫俗儀礼の一考察」, 『国際地域学研究』, 1:35-50

[6] 王宏剛 (1999) 「中国における満族シャーマニズム研究の現状」, 楠木賢道, 鈴木真訳, 『満族史研究通信』第 8 号, 1999 年. 佐藤憲昭 (2000) 「韓国のシャーマニズムに関する覚え書き」, 『駒澤大学文化』, 19:6-20

[7] 桑野栄治 (2002) 「朝鮮世祖代の儀礼と王権」, 久留米大学文学部紀要, 国際文化学科編第 19 号, pp89-114. 野村伸一 (2003) 「李能和『朝鮮の巫俗』註」, 『日吉紀要言語・文化・コミュニケーション』, 30:1-17

[8] 邢基柱 (2004) 「朝鮮時代と日本植民時代のソウル」, 『東アジアの都市形態と文明史』第 21 号, 2004 年 1 月, pp313-325.

[9] 徐東帝・宮崎涼子・川寄陽・水野直樹・西垣安比古 (2013) 「京城都市構想図に関する研究」, 『日本建築学会計画系論文集』第 78 巻第 687 号, 2013 年 5 月, pp1179-1186.

[10] 赤枝尚樹 (2013) 「Fischer 下位文化の理論と可能性」, 『理論と方法』28 号, 学会賞受賞講演, pp1-16.

[11] 五島寧 (2013) 「京城の市街地整備における日本人居留地の影響に関する研究」, 『公益社団法人日本都市計画学会都市計画論文集』第 48 号 No. 3, 2013 年 10 月, pp513-518.

[12] 山口公一 (2014) 「敗戦直後の海外神社—朝鮮の神社を例に—」, 『アジア学科年報』8:43-51

[13] 孫知慧 (2015) 「忘れられた近代の知識人『金九経』に関する調査」, 『大谷学報』, 94-2: 91-119

[14] 桑野栄治 (2016) 「朝鮮仁祖代における対明遥拝儀礼の変容」, 『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』12 号, 2016 年 3 月, pp168-202.

- [15] 篠原啓方 (2017) 「三田渡碑 (大清皇帝功德碑) の予備的考察」, 『東アジア文化交渉研究』巻 10, 2017 年 3 月, pp561-572. 新里嘉伸 (2017) 「韓国における巫俗言説の構造と展開」, 『宗教と社会 ReligionandSociety』, 2017. 06, Vol. 23:95-109
- [16] 増井寛也 (2017) 「清初の満洲人サマン saman とその変容」, 『立命館文学』第 651 号, 立命館大学人文学会, 2017 年. 李裕淑 (2017) 「在日コリアン社会のチェサの文化変容—儒教的チェサと仏壇との併祀(へいし) —」, 立命館言語文化研究 28 巻 3 号, pp143-159.
- [17] 大野広之 (2018) 「算命学鑑定における冬至説の再考察—歳首選定及び満漢朝三体言語資料をめぐって—」, 『人文学 報』, No. 514-12, 首都大学東京人文科学研究科, 2018 年 3 月.
- [18] 大野広之 (2019) 「冬至祭天祈祷に関する満文資料『太廟祝版底』について」, 『人文学報』 No. 515-12, 首都大学東京人文科学研究科, 2019 年 3 月.
- [19] 大野広之 (2020) 「天壇の御神体に観られる満漢合璧について」, 『人文学報』 No. 516-12, 首都大学東京人文科学研究科, 2020 年 3 月.

#### 口頭発表:

- (1) 野村伸一 (2006) 「目連戯からみた近世東アジアの芸能空間 (要旨)」  
<https://web.flet.keio.ac.jp/~shnomura/mokurenkara.html> 2022. 3. 1 閲覧.
- (2) 大野広之 (2021a) 「ソウル圜丘壇をめぐる若干の考察」, 文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 (C) 「満洲語文献に基づいた東アジア言語文化史研究 (課題番号 19K00578 代表: 荒木典子)」第 6 回清代言語接触研究会日時: 2021 年 3 月 27 日 14:00-16:00 オンライン開催における口頭発表.
- (3) 大野広之 (2021b) 「天壇・社稷壇祭祀執行における「犠牲」をめぐる若干の考察」, 文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 (C) 「満洲語文献に基づいた東アジア言語文化史研究 (課題番号 19K00578 代表: 荒木典子)」第 7 回 清代言語接触研究会 2021 年 9 月 23 日 13:00 開始 Zoom オンライン開催における口頭発表.
- (4) 大野広之 (2022) 「国師堂(국사당) 移転に観られる「犠牲(희생)」についての一考察—薩満と巫俗との狭間で—」, 文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 (C) 「満洲語文献に基づいた東アジア言語文化史的研究」 (課題番号 19K00578 代表 荒木典子), 第 8 回清代言語接触研究会 2022 年 3 月 10 日, 東京都立大学南大沢キャンパス 5 号館 314 演習室(ハイブリッド開催)における口頭発表.

#### 動 画:

- エルマチャイ Mihoelma (2021) 「韓国世界遺産宗廟解説 (日本語)」  
<https://www.youtube.com/watch?v=QL5rj6pW4Q0&list=PL9zF2k056Iyv0y0MvrQzSiUnXn1BPkxLI&index=1&t=1753s> 2022. 2. 26 閲覧.

김효 (2021) 「국사당과선바위, 목멱산과목멱신사, 인왕산과국사당」

<https://www.youtube.com/watch?v=vawKMpash9s> 2022. 3. 7 閲覧.

**画 像:**

京城日之出商工「京城名所朝鮮神宮」, 京都大学附属図書館蔵.

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00030106>

2022. 3. 4 閲覧.

**注:**本論文は、第 9 回清代言語接触研究会 科研費基盤(C)「満洲語文献に基づいた東アジア言語文化史的研究」(課題番号 19K00578) 於東京都立大学南大沢キャンパス 314 演習室にて口頭発表したものに加筆したものである。

(所属先: 東京都立大学客員研究員)